

ハリー・ポッター現象は、

どこへいったのか

三宅 興子

はじめに

いま、日本の子どもの本の世界がどうなっているのかを語るのとはとても難しいし、「子どもの本」というくくりすら、有効なのかどうか疑わしい状況にある。「大人の絵本」や「大人の子どもの本」などというブックリストも目にするようになってきており、これまでも、そんなにはっきりと線があったわけではないのだが、より不鮮明になってきているようである。

毎年、発行される大阪市の図書館の「こどものほんだな」の担当の方によると、年々、推薦したい本が減少してきていて、という。二〇〇八年版では、全部で五十一タイトルしかはいっていない（内、翻訳物語は十タイトル）。恐らく、

選書の基準をかえれば、タイトル数を増やすのは、容易であろうが、ずっと、続いてきた基準をあまり動かさないとするとこういう結果になるのだろう。

情報収集能力の不足は痛感しているし、また、満遍なく読んでいともいえない個人である私の頼りは、「長年読んできた」という経験だけなので、二〇〇八年に翻訳出版された子どもの本を机上に積み上げて、考えたことを「覚書」のように記すことしかできない。

「ハリー・ポッター」シリーズ最終巻の刊行

二〇〇八年夏、子どもの本の世界の話題をさらってきた「ハリー・ポッター」の最終巻である第七巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』上、下（J・K・ローリング作 松岡佑子訳 静山社）が翻訳、発売された。第一巻の翻訳が一九九九年だったので、約十年で完結したことになる。世界的な「ハリー・ポッター現象」に対して、何だったかを「過去形」で語ることは時期尚早であるが、近隣の図書館や学生などまわりで取材してみると、一時のブームは去っており、第七巻は、図書館の棚にないが、あとは、ずらりと棚に残っており、どうも、新しい読者をつかんでいないようだという感触が得られた。

作品に対する熱気のかなりの部分が、メディア戦略でもたらされたものであった。なんとかここまで、初期の読者